

靖国神社問題を考える

—学生のアンケート調査からみえる倒錯した時代状況

源 淳 子

論文要旨

二〇〇一年、小泉純一郎首相（当時）が政権中に行った靖国神社参拝は、戦後日本社会の転換を象徴する政治的意図を隠蔽したパフォーマンスではなかったか。二〇〇四年二月には「靖国訴訟」が提訴された。戦後、靖国神社は一宗教法人となり、官から民へと転換されるが、戦後も「英霊」の合祀を続け、国権との結びつきを保ち現在に至っている。その問題性は靖国神社創建からの歴史を知らない限りわからない。そうしたなかで靖国神社問題への学生の認識度の低さを実感していた。そこで靖国神社をどの程度認識しているかのアンケート調査を行い、一八三一人の回答を得た。そして、その回答から「専制的社会」という新たな時代の思潮を読み取った。靖国神社問題は、現在も日本の政治の中枢に存在している。

目次

プロローグ

- 1 靖国神社と対する「個人」
- 2 学生に教える靖国神社問題
- 3 アンケート調査
 - (1) 先行研究
 - (2) アンケート調査の内容

(3) 調査対象の属性

(4) 学生にとっての靖国神社

エピソードにかえて―何を問題として伝えるべきか

プロローグ

二〇〇九年二月二五日、大阪地裁はひとつの大きな判決をくだした。原告の主張をまったく許さない判決だった。原告はアジア太平洋戦争で戦死した人たちの遺族である。遺族の訴えは自分たちの承諾も何もなく、戦争で死んだ父や兄などが靖国神社に祀られていることに対して、「故人を偲ぶ権利」が侵害されているとして、靖国神社の「霊壘簿」から父や兄たちの名前を削除することを求めた訴訟だった。大阪地裁は遺族の請求をすべて棄却する判決をいい渡し、裁判長は「遺族が主張する感情は不快や嫌悪の感情としかいえず、法的に保護すべき利益とはいえない」と述べた。

これは、奇妙な判決である。靖国神社は、「国のために殉死」した兵士たちを「英霊」として讃え、国家主権によって「神」として祀ってきた。天皇を現人神とする国家神道を高揚する軍国施設の役割を果たし、天皇制国家の中核として存在してきた。しかし、戦後、靖国神社はGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の国家神道を解体させる「神道指令」とともに官から民に移り、一宗教法人となった。ところが、その祭神は戦前と変わることなく、国家（旧厚生省）との関係を保ち「英霊」として合祀し続けられたのである。いうまでもないことだが、戦後、一宗教法人となった靖国神社が「個人」の意思に反するような宗教祭祀または宗教儀礼を行うことは、「宗教」の倫理に反する。ことに靖国神社のごとく「国家」のために創建された軍国施設は、国家を相対化する「個人」の人格権や人権にほど遠い存在であることは論を俟たない。さらに、国家神道解体後に発布された『日本国憲法』に照らしても「個人」の「信教の自由」を踏みにじっている。

大阪地裁がしりぞけた裁判は、靖国神社を被告として訴えた初の裁判でもあった。靖国神社と国の一体性も争点となった。一九七八年にはA級戦犯が合祀されたが、国の関与がなかったらできなかつたことであつた。一宗教法人である靖国神社に国が「個人」の情報を提供するこ

とは、同じく『日本国憲法』の「政教分離原則」にも重大な影響を与える。しかし、判決はこれを「国の行為に事実上の強制とみられる影響力があったとはいえない」として原告の訴えを退けた。それはまったくの事実誤認であり、裁判官の無知をさらけ出している。

この度の裁判以前（二〇〇四年二月）にも、小泉純一郎首相（当時）の靖国神社参拝を巡る訴訟が行われている。首相の参拝は「公的」であると認められながら、首相の参拝が違憲であるという訴えは、ここでも棄却され、控訴後の大阪高裁も完全に原告の訴えを退ける控訴棄却という結果となった（二〇〇五年九月）。こうした現代の靖国神社を巡る一連の裁判は、戦前の軍国施設であった靖国神社が今なお国家主権の強い影響下にある存在であることを意味し、靖国神社の存在自体が、近代日本における国家主権と国民主権の問題をあらさまに表象しているといえよう。

以上のように、現在の靖国神社をめぐる問題は刻々と新たな状況を生み出している。そういうなかにあつて、学生はいついこうした問題をどう受け止めているのだろうか。裁判までは関心がなくても、小泉首相の靖国神社参拝は知っているのだろうか。それをどのように思ったのだろう。そうした靖国神社への認識度を知りたいという思いがおきた。当初アンケートをするのは、わたしの授業を受けている学生でいいと考えていたが、もう少し広げようと友人にお願いすることになった。友人が行ってくれたアンケートの数は一八〇〇枚を超えた。予想外の数の多さに別の不安が胸をよぎった。こうした分析の方法を専門としないわたしは、集まったアンケートの方法、クロスのやり方、その後の論文の書き方などに悩んだ。幸い世界人権問題研究センターで一緒だった鈴木清美さんが援助の手をさしのべてくださった。集計に関して、彼女の手を煩わすことになった。彼女の援助なくして、この論文を書くことはできなかったのである。こうした感謝の気持ちは「あとがき」に記されるのが常のようであるが、あえてわたしははじめに気持ちを表したいと思う。また、アンケートを学生に実施してくださった友人たちに心からお礼を伝えたい。わたしが実際にやってみて、わずらわしかったことを一番に理解しているからである。いちいちお名前を記さないが、ほんとうにありがとうございます。

1 靖国神社と相対する「個人」

戦後の靖国神社問題に関して、GHQの宗教政策に大きな影響を与えた宗教学の岸本英夫は、「信教の自由」について「自分の納得しない強

制された方法では、人間は、自分の人間の問題を解決することができない。したがって、自分の信仰体制をはっきりもっている人は、それを守って、抵抗せざるをえない。これが、信教の自由の問題である」と講じた。一連の靖国訴訟は、戦後、国家神道が解体したあとも、その亡霊どもの衣装を借りて、「国家主権」にまとりついている「国家」（靖国神社）を「個人」が訴えたことを意味する。

* * *

二〇〇八年六月、わたしは、『「母」たちの戦争と平和 戦争を知らないわたしとあなたに』（三一書房）を出版した。拙著は、一九二〇年代生まれの八〇歳代の三人の女性の戦争体験と戦後、彼女たちが国家主権の軛に気づき、「個人」として国民の主権に目覚め、「戦争反対・靖国反対」に至る契機を聞き取りし、まとめたものである。また、三人の女性に加え、わたしの母も同じ八〇歳代である。これまできちんと戦争体験と戦後を聞いてこなかった経緯も踏まえ、聞き取りをした。

その本をまとめようと思った動機は、大きく二点あった。

まず第一点は、八〇歳代の女性が戦後マイノリティ（被害者意識を抱いて五五年体制を支えてきたマジョリティに対抗する位置）として生きるに至った経緯であった。彼女たちが受けた戦前の教育体制からどうして戦後、非個人的存在から「個人」へと変革しえたのか。その「分岐点」を知りたかったためである。大日本帝国下の戦争で、天皇が「神」であること、男性は「君（天皇）のため国のため」に戦い、女性は銃後を守ることをあたりまえと信じ青春時代を過ごした彼女たちは、大切な人を戦争で亡くした被害者でもあった。しかし、彼女たちには、あることから敗戦国の被害者意識から戦争への加害者意識への転換がおきた。何を契機として加害者意識をもつことになったのか。そこには、戦争を知らない戦後生まれのわたしたちへのメッセージがあると思ったのである。

もう一点は、「戦争を知らない世代」が多くなった現在、とくに学生と接していて感じるのは、戦争観の希薄さである。また少数派ではあるが、戦争を肯定する学生の存在である。そうした学生は、ジェンダーバッシング（反フェミニズム）に表れるバックラッシュ派に近い考え方を披瀝する。そして、わたしがもつとも恐れるのは、「個人」ではなく、「私人」に過ぎない多くの学生である。その「私人」には「公共的な関心」が欠落しているばかりか、「戦争の肯定」に転じる可能性を感じるからである。もっとありていにいえば、日本が行ってきた戦争について思惟したことがない学生である。受験技術だけを勉強してきた学生である。憲法の「改正」問題、靖国神社問題、「慰安婦」問題などに無関心でいられる学生である。かつて被害者意識のままに生きてきて日本を世界第二位の「大国」にした大人たちと同様に、「個人」でなく

「モノ」（貨幣）に仕える存在者を疑いなく肯定する姿がみえるのである。そうした学生に戦争を考え、日本の憲法を考え、日本の将来を考えてほしいと思ったからである。

わたしは、近代日本の国民意識にかかわる問題として、靖国神社問題は避けて通ることができないと考えてきた。そうしたなかで、靖国神社の存在さえ知らなかった学生が、二〇〇一年に始まった小泉首相の靖国神社参拝は、靖国神社に関心をもつきっかけとなった。しかし、ほとんどの学生は、靖国神社がどんな役割を果たしてきたかを知らない。小泉首相のことはにすんなりと頷き、参拝はいいことだと考えるか、中国・韓国からの批判に小泉首相と同じく内政干渉だとかのいづれかであった。

講義で靖国神社の歴史と現在の問題を説明すると、必ずコミュニケーションカードに「知らなかった」「考えたことがなかった」「教えてもらっていない」などの感想が寄せられた。毎年同じことを繰り返しながら、一度アンケートをとって調べてみようと思いついたのは、『母』たちの戦争と平和』の原稿を書き上げた二〇〇八年の春である。

2 学生に教える靖国神社問題

毎年学生に講義する靖国神社問題は、靖国神社創建の歴史から始める。この講義を始めたときにこんな経験をしたことがある。軽い気持ちで、「靖国神社がいつできたかを知っていますか」と問いかけたときのことである。前列に座っている学生を指したら、「昔」と答えた。わたしは、明治という時代はもう学生には遠い昔のことなのだと思い思った。しかし、昔ではあまりにも漠然としているので、「いつの時代の昔？」と聞き返した。学生の答えは「古代」だった。それ以来、靖国神社の成り立ちから話さなければならぬことを痛感した。

靖国神社は、「幕末維新のけいせい政争の過程で生まれたた招魂の思想」²⁾によって生まれた。その結果、一八六九（明治二）年の戊辰戦争では、天皇方に忠心を尽くして戦死した者だけを招魂社（最初は京都にあった）に祀った。靖国神社の始まりである。しかも招魂社には伝統的な神社の祭祀と違った形態がつけられた。それまでの日本の御霊信仰には、恨みをもって死んだ人を神にして祀る伝統（例えば、菅原道真を「神」として祀った北野天満宮）があったが、招魂社には、敗けて死んだ者は捨て置くという政策が打ち出された。天皇方に与しないと、戦死後祀ってもらえないという意味である。このことは、日本の近代化思想からみれば、驚くに値しない。天皇崇拝を基軸とする中央集権国家体制を構

築するためである。その後も新政府軍は会津、函館などで幕府方を破り、天皇方の戦死者に限り東京招魂社に祀った。そして一八七九（明治一二）年、東京招魂社は別格官弊社靖国神社となる。その管轄は陸・海軍省である。後には内務省も管轄する。

靖国神社は、天皇方（国家）で戦死した軍人・軍属を神として祀る軍国神社であり、戦死者の「名誉ある行為」を国として顕彰し、戦死者を「慰霊」した。そして、彼らは「英霊」と呼ばれ、靖国神社は「英霊」が次から次に増える軍国神社であった。戊辰戦争や西南戦争後は日清・日露戦争をはじめとする外国との戦争で戦死する軍人・軍属を祀ることになっていく。後に従軍看護婦や満州開拓団員という立場の人も祀られるが、基本的には軍人・軍属の男性である。このように靖国神社は天皇制国家体制の中核をなし、その時代社会における国家と戦争という切っても切れない関係をもとに、天皇を頂点とする国体を護持させる精神（信仰）を国民に徹底的に内面化させる宗教的機能を果たしていく。中央集権化を達成した国家を護持する超文化施設である。国民への教化は『教育勅語』（一八九〇年）で行われ、軍人には『軍人勅諭』（一八八二年）で徹底的にたたき込まれた。

アジア太平洋戦争になると、日本精神の高揚が強化され、日本人にとって、男性は「靖国で会おう」という合い言葉のもとに、「君のため国のために」戦って死ぬことがアイデンティティとなり、「生きる道」（同時に「死ぬ道」となった。女性も男性の「靖国で会おう」を受け止め、銃後を守ることを教育された。靖国神社は、まさに天皇・国家のために戦って死ぬことのよりどころとなっていた。

戦後、靖国神社は単立の一宗教法人として生き残った。『日本国憲法』第二〇条のもとで、政教分離が定まり、国家神道も解体した。しかし、靖国神社は戦前の国家とのつながりを切らないまま「英霊」の「合祀」を続け、生き延びてきた。「合祀」を可能としたのは政府（旧厚生省）との関連がない限りできなかったはずである。事実、厚生省は戦後も靖国神社と連携して合祀を「聖旨」として絶やさず行っていた。田中伸尚氏は、その「聖旨」の意味について、「天皇・国家のための戦死者を英霊として讃えて靖国神社に合祀すること」と説明している。そして、戦後の厚生省と靖国神社の関係、つまり「合祀」のための名簿の提示についても、厚生省に保管されていた関係書類から明らかにしている。一九七八年にはA級戦犯の合祀も行われた。

靖国神社のこうした歴史は、右派がめざす現在の『憲法』第九条の「改正」と結びつけると、「国家がおこした戦争で戦死した人をどう祀るか」という問題を浮上させる。国際社会では、戦死した兵士を国が祀るのを当然としている国がほとんどである。学生が、必ず比較して出してくるのがアメリカのアーリントン墓地である。靖国神社が戦死した人（なかには一般の人も含んで考えている学生もいる）の墓であると認

識している学生も多い。つまり、戦死した兵士を国が祀ることを大前提とし、それをうまく利用したのが当時の小泉首相の靖国神社参拝だった。小泉首相の「心ならずも戦争で命を落とさざるをえなかった人々への哀悼をささげる」という「論理」は、近代日本の中央集権化に伴う国民意識を最大限活用したデマゴギーを隠蔽するロジックだといえよう。

丸山眞男は、すでにそうしたデマゴギーを隠蔽することを「自己を民主化する課題を放棄した」⁴ものと表していた。「自己」を放棄した「国民」をつくり出すことが、近代日本の中央集権的民族国家体制の「体臭」となっていたといった。その「体臭」を国民の「内在的な性格」と捉えた。それはまた小泉首相の靖国神社参拝にもその「体臭」が読み取れるのである。つまり、小泉首相は、戦前の靖国神社をきちんと相対化しないまま、アジア諸外国の世論も意に介さず、「国民の道徳」というロジックで参拝を強行したからである。「小泉劇場」の観客であった学生は、その小泉首相の参拝をどのようにみていたのだろうか。

わたしの靖国神社問題の講義を初めて聞いた学生は、十分に理解できたとはいえないのが実状である。また、右派の評論家や学者や宗教団体に共鳴してきた学生は考えを変えることはなかった。わたしには、それが「自己を民主化する課題を放棄した」⁵ことで可能となる「信仰者」の姿のように思えてしまう。そして、それにもましておぞましい現象は、小泉首相以降の首相が靖国神社参拝を行わないことから、靖国神社問題に関心をもって聞く学生が極端に少なくなったことである。

3 アンケート調査

(1) 先行研究

靖国神社問題を学生を対象にした先行研究を探すことは今回できなかった。ただ、日中・日韓の学生の意識調査のなかに靖国神社問題に関連した問があった。

最初に紹介するのは、二〇〇一年一〇月に行われた「日中問題にかんする大学生の意識調査」⁵である。同調査には「小泉首相の靖国神社参拝についての中国政府の態度をどう思いますか」「小泉首相は今年(二〇〇一年)の八月一三日に靖国神社に参拝しました。あなたはこれを支持しますか」の項目があり、後者の問を受けて、「支持する」と答えた学生にその理由を4択で、「支持しない」と答えた学生にその理由を

4択で」という質問がある。
その調査結果は次の通りである。

問11 小泉首相の靖国神社参拝についての
中国政府の態度をどう思いますか？

反対するのは当然だと思う	981人	21.7%
理解はできるが少し行き過ぎ	2196人	48.7%
日本の国民感情を無視した 内政干渉である	648人	14.4%
わからない	648人	14.4%

問12 小泉首相は今年の8月13日に靖国神社を参拝しました。あなたはこれを支持しますか？

支持する	1702人	37.7%
支持しない	1280人	28.4%
どちらとも言えない	1367人	30.3%

問12-1 「支持する」と答えた学生にその理由を4択で。(内1つは自由回答)

「戦争犠牲者すべてに深い反省と哀悼の意をささげたい」という首相の考えに同調	1218人	71.9%
憲法上なんら問題ないから	125人	7.4%
外国の干渉にひるんではならない	96人	5.7%

問12-2 「支持しない」と答えた学生にその理由を4択で。(内1つは自由回答)

8月15日に参拝すべきだったから	202人	15.9%
近隣諸国への配慮から	574人	45.3%
憲法上問題だから	131人	10.3%

また、立命館大学経済学部三回生の有志が行った報告として「日本と中国・韓国の意識調査アンケート」(二〇〇五年調査、一三四枚の有効回答)がある。このなかに「靖国神社に参拝するべきか」の問がある。結果は左記の通りである。

「プロローグ」に記したように、アンケート調査は友人たちの協力で思いがけない多くの回答数が集まった。結果は下記の通りである。

実施時期 二〇〇八年四月～一〇月

回収 一八三六

有効回答 一八三一（無効五）

百パーセントに近い回答率は、回収方法がすべて直接的な回収のおかげである。

調査対象となった大学は関西の一一大学（国立大学一、私学四年生大学九、短期大学二）である。

以下、アンケートの集計結果をみていくことにする。

（3）調査対象の属性

学年別

表1 学年別

	人数	パーセント
1回生	1157	63.2
2回生	231	12.6
3回生	312	17.0
4回生	111	6.1
5回生以上院生を含む	19	1.0
無回答	1	0.1
合計	1831	100.0

学生は一回生から大学院生を含んで五回生に及んでいるが、六三・二パーセントは一回生だった。アンケートをお願いした担当者がジェンダー論や人権問題にかんする講座を受けもっていた影響である。

男女比

表2 男女比

	人数	パーセント
男性	849	46.4
女性	925	50.5
無回答	57	3.1
合計	1831	100.0

男性八四九人（四六・四パーセント）、女性九二五人（五〇・五パーセント）、無回答が五七人で、ほぼ半々の比率になった。ジェンダーに関係する科目を担当している友人が多かったため、女性の人数が圧倒的に多くなるのではないかと予想したが、予想に反する喜ばしい結果となった。

出身地

出身地にかんしては、アンケートが関西の大学に限られていることから偏りは否めない。そこで、アンケートは関西地域のみ府県名を尋ね、あとは地方ごとにとまとめた。関西地域では大阪府六七二人（三六・七パーセント）、兵庫県一九一人（一〇・四パーセント）、京都府一五五人（八・五パーセント）、奈良県一二四人（六・八パーセント）、滋賀県一〇八人（五・九パーセント）、和歌山県四五人（二・五パーセント）となり、地方別では中国・四国地方一六八人（九・二パーセント）、中部・北陸地方一五二人（八・三パーセント）、九州・沖縄地方五四人（二・九パーセント）であった。留学生は全部で五〇人いたが、中国が三九人で圧倒的に多い。

表3 出身地

	人数	パーセント
大阪	672	36.7
京都	155	8.5
兵庫	191	10.4
奈良	124	6.8
滋賀	108	5.9
和歌山	45	2.5
中国・四国	168	9.2
関東	38	2.1
北海道	6	0.3
九州・沖縄	54	2.9
中部・北陸	152	8.3
東北	6	0.3
日本出身で無回答	62	3.4
中国	39	2.1
ルクセンブルグ	1	0.1
南アフリカ	1	0.1
タイ	1	0.1
モンゴル	1	0.1
アメリカ	1	0.1
韓国	1	0.1
台湾	1	0.1
留学生で出身国無回答	4	0.2
合計	1831	100.0

(4) 学生にとっての靖国神社

1 靖国神社はどこにあるか知っていますか。

はい いいえ

表4 性別と靖国神社はどこにあるか
知っていますかのクロス表

性別		はい	いいえ	無回答	合計
男性	人数	436	405	8	849
	パーセント	49.4	43.1	80.0	46.4
女性	人数	412	511	2	925
	パーセント	46.7	54.4	20.0	50.5
無回答	人数	34	23	0	57
	パーセント	3.9	2.4	0.0	3.1
合計	人数	882	939	10	1831
	パーセント	100.0	100.0	100.0	100.0

靖国神社の場所を聞いた回答は、どこにあるかを知っている学生が八八二人（四八・二パーセント）、知らない学生が九三九人（五一・三パーセント）の結果であったが、知っているとは答えた学生にその「所在地」まで尋ねていないために正確に知っているかどうか明確な判断はできない結果となった。

男女差も上記のように大きな違いはないし、それは以下の回答からも靖国神社問題全般にわたって特筆すべき男女差の傾向はなかった。

2 靖国神社に行ったことがありますか。

はい いいえ

靖国神社に行ったことがある学生が六八人（三・七パーセント）いた。授業のなかで東京へ行く機会があれば、靖国神社を見学することを勧めている。ふるさとの神社や初詣に行く神社とは趣が

表5 性別と靖国神社に行ったことがありますかのクロス表

性別		はい	いいえ	無回答	合計
男性	人数	51	796	2	849
	パーセント	75.0	45.2	66.7	46.4
女性	人数	13	911	1	925
	パーセント	19.1	51.8	33.3	50.5
無回答	人数	4	53	0	57
	パーセント	5.9	3.0	0.0	3.1
合計	人数	68	1760	3	1831
	パーセント	100.0	100.0	100.0	100.0

表6 性別と靖国神社はいつつくられたと思いますかのクロス表

性別		古代	中世	近世	近代	無回答	合計
男性	人数	35	153	268	380	13	849
	パーセント	46.1	45.0	42.6	50.3	41.9	46.4
女性	人数	36	177	348	349	15	925
	パーセント	47.4	52.1	55.3	46.2	48.4	50.5
無回答	人数	5	10	13	26	3	57
	パーセント	6.6	2.9	2.1	3.4	9.7	3.1
合計	人数	76	340	629	755	31	1831
	パーセント	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

ここで問題となるのは、わたしが区分した「古代・中世・近世・近代」を学生が理解していないことを授業を通して知ったことだ。このことは調査を依頼した友人たちからも指摘を受けた。とくに、近世と近代の違いを知らないという指摘である。近世と近代を混同していると考えるならば、両者をあわすと七五・六パーセントの正解率になる。また、先述したように、「古代」と答えた学生が、四・二パーセントとなっている。こうした実状から、七五・六パーセントの学生が靖国神社の創建時を正確に認識しているとはいえない。

△靖国神社はどこにあるか知っていますか△と靖国神社はいつつくられたか△をクロスすると下記のようになる。

靖国神社がどこにあるかを知っている学生でも、創建された時代に対して△古代・中世・近世△と回答した学生が四六三人もいて、五二・六パーセントが△近代△

3 靖国神社はいつつくられたと思いますか。○で囲んでください。

古代 中世 近世 近代

違うことが一歩足を踏み入れることで分かるからである。また、どんな感想をもつにしても、「遊就館」を見学するのも必須である。

表7 靖国神社はどこにあるか知っていますかと靖国神社はいつつくられたと思いますかのクロス表

		靖国神社はいつつくられたと思いますか					
		古代	中世	近世	近代	無回答	合計
知っている	人数	27	139	297	401	18	882
	パーセント	3.1	15.8	33.7	45.5	2.0	100.0
知らない	人数	49	200	329	348	13	939
	パーセント	5.2	21.3	35.0	37.1	1.4	100.0
無回答	人数	0	1	3	6	0	10
	パーセント	0.0	10.0	30.0	60.0	0.0	100.0
合計	人数	76	340	629	755	31	1831
	パーセント	4.2	18.6	34.4	41.2	1.7	100.0

と回答できなかった。靖国神社の創建時と場所が一致していないことがわかる。

4 靖国神社はどんな神社だと思いますか。
()

表8 靖国神社はどんな神社だと思いますか

	男性	女性	無回答	人数	%
(A)「兵士を祀る」「兵士・A級戦犯を祀る」「英霊を祀る」等	180	192	6	378	20.6
(B)「A級戦犯を祀る」	116	142	11	269	14.7
(C)「戦死者を祀る」	245	293	7	545	29.8
(D)「戦争に関係している」	35	43	2	80	4.4
(E)「わからない」	30	13	3	46	2.5
(F)明らかに間違いを記したもの	106	87	7	200	10.9
(G)(A)～(F)以外	48	41	2	91	5.0
(H)無回答	89	114	19	222	12.1

自由記述であるため、さまざまな回答があった。そこで、次のように分類をして集計を出した。

- (A) 「兵士を祀る」「兵士・A級戦犯を祀る」「英霊を祀る」等のことばが入っているもの
- (B) 「A級戦犯を祀る」のみを書いているもの
- (C) 「戦死者を祀る」としか書いていないもの、この分類にあたっては、兵士をイメージに入れた学生もいるだろうが、戦死したすべての人なども書いているので(A)と区別した
- (D) 「戦争に関係している」ということばが入っているもの。「祀る」「墓」等も含まれる
- (E) 「わからない」と記述したもの
- (F) 明らかに間違いを記したもの
- (G) (A)(B)(C)(D)(E)(F)以外のもの、例えば、「いろいろな問題を抱えている」「国が特別扱った神社」などの記述があるもの
- (H) 無回答

(A)と(B)では三五・三パーセントの回答となり、靖国神社の特色を知っていることになる。(C)(D)のなかに兵士をイメージに入れて回答した人、戦争の関係と兵士の戦死などをイメージした回答を含めるなら、(A)(B)(C)(D)で六九・五パーセントとなる。また、(E)(F)(G)(H)の間違った表記や知らない学生が三〇・五パーセントである。靖国神社の創建時からの役割、戦後の靖国神社問題をどの程度認識しているかは本アンケートだけでは判然としないものの、靖国神社の存在理由を知らない学生が三分の一を占めることは確かである。同時に、靖国神社(招魂社を含む)の創建理由を書いた回答はまったくなかった。

靖国神社を知らないことは学生の責任とはいえないだろう。むしろ近代日本史と「戦争」を語り継いでこなかった社会や学校教育の場で靖国神社の存在を教えてこなかったことが大きな理由になる。ある学生は「近・現代の歴史を中学・高校とまったく教えてもらわなかった」と悪びれることなく答えたが、それは彼の責任ではない。

5 靖国神社に二〇〇一年から二〇〇六年まで当時の小泉首相が参拝したことを知っていますか。

はい いいえ

二〇〇一年から〇六度の小泉首相の靖国神社参拝を知っている学生は九五・六パーセントに上った。やはりあれだけマスメディアを賑わせたし、一回生の学生も最後の二〇〇六年の靖国神社参拝を高校時代に知っていたのである。しかし、四・二パーセント(七六人)と低いもの首相の靖国神社参拝を知らない学生(留学生を含む)がいたことにも驚きを隠せない。

靖国神社参拝を「国民への公約」として繰り返し行ってきた小泉首相の政治体制は、「新自由主義」のもとにある。柄谷行人氏は、その政治体制を「専制社会になったと思います。(中略)現在の専制的社会は、別に、専制君主や軍事的な独裁者が支配する社会ではありません。全体主義ではない。そのような専制国家に比べれば、日本は、民主権の体制であり、代表制民主主義の国です」と述べる。そして、その専制的社会は、「封建的・身分的中間勢力の抵抗が脆いところにある」という丸山眞男の所説を引用しながら、戦後の社会体制の変容を分析する。戦後、労働組合・部落解放同盟・大学の自治、新左翼等々が「中間勢力」として存在した。つまり、丸山のいう「中間勢力」が専制体制を阻止する力になっていたのである。しかし、現在の日本には、国家体制を直接批判し、国家体制に心身をもってぶつかっていく「個人」がごく少

表9 性別と靖国神社に2001年から2006年まで当時の小泉首相が参拝したことを知っているかとのクロス表

性別		はい	いいえ	無回答	合計
男性	人数	801	46	2	849
	パーセント	45.8	60.5	40.0	46.4
女性	人数	896	27	2	925
	パーセント	51.2	35.5	40.0	50.5
無回答	人数	53	3	1	57
	パーセント	3.0	3.9	20.0	3.1
合計	人数	1750	76	5	1831
	パーセント	100.0	100.0	100.0	100.0

数となった。つまり、「中間勢力」がなくなつた。そのもつとも象徴的な時期が二〇〇〇年であり、その後小泉政権が登場してきたと分析する。「もう敵はいない。彼は中間勢力の残党を、「抵抗勢力」と呼んで一掃した」のである。だから現在の日本は専制的社会であるという。

柄谷氏のこの論評に反論することは難しい。小泉首相の靖国神社参拝は、新たな政治的目的を秘めていたといえる。それはまた、マスメディアが過剰に報じた「小泉劇場」の成果といえるのだろう。

6 質問5で「はい」と答えた人はそのときどう思いましたか。

(1) 参拝するのはいいことである。

(2) 参拝するのはおかしい。

(3) その他)

マスメディアの影響を受けやすいことを改めて感じたのは、参拝を知っていた学生の三五・二パーセントが参拝するのはいいことである」と回答し、参拝するのはおかしいと回答した学生は一五・二パーセントにとどまったことだ。さらに、四七パーセントの学生がその他と回答している。

先の岡田臣弘氏の行ったアンケート調査の結果と比較すると、参拝支持は三七・七パーセントであったので、だいたい同じ比率を示して

自由」に関係するものである。また、「何も思わない」「関心がない」と「どっちでもいい」「いいとかおかしいとか関係ない」をあわせると、二六・四パーセントとなる。首相の靖国神社参拝は知っ

表10 質問5で「はい」と答えた人はそのときどう思いましたかと性別と靖国神社に2001年から2006年まで当時の小泉首相が参拝したことを知っているかのクロス表

		男性	女性	無回答	合計
参拝するのはいいことである	人数	325	280	11	616
	パーセント	40.6	31.3	20.8	35.2
参拝するのはおかしい	人数	123	127	16	266
	パーセント	15.4	14.2	30.2	15.2
その他	人数	337	464	22	823
	パーセント	42.1	51.8	41.5	47.0
無回答	人数	16	25	4	45
	パーセント	2.0	2.8	7.5	2.6
合計	人数	801	896	53	1750
	パーセント	100.0	100.0	100.0	100.0

いる。なお△不支持△は、先行調査の二八・四パーセントと比較すると、一五・二パーセントであり、およそ一三ポイントの差が出ている。その分△どちらとも言えない△が三〇・三パーセントあり、一六ポイント以上先行研究のほうが低くなっている。

△その他△の自由記述については、次のような分類を行った。

(A) 「何も思わない」「関心がない」ということばおよび意味が入っているもの

(B) 「参拝するのはいい」「信仰の自由」「個人の自由」に関係することはが入っているもの

(C) 「どっちでもいい」「いいとかおかしいとか関係ない」に入るもの

(D) 「わからない」に入るもの

(E) (A) (B) (C) (D) 以外のもの

(F) 無回答

表11 <その他>の自由記述

	男性	女性	無回答	人数	%
(A) 「何も思わない」「関心がない」	56	54	6	116	14.1
(B) 「参拝するのはいい」「信仰の自由」「個人の自由」	72	91	4	167	20.3
(C) 「どっちでもいい」「いいとかおかしいとか関係ない」	62	38	1	101	12.3
(D) 「わからない」	72	128	4	204	24.8
(E) (A) (B) (C) (D) 以外	77	119	5	201	24.4
(F) 無回答	9	24	2	34	4.1

表12 <参拝するのはいいことである>の自由記述

	男性	女性	無回答	人数	%
(A)「敬うべき」「追悼すべき」「国のために死んだから」	52	48	3	103	16.7
(B)「個人の自由」	47	34	1	82	13.3
(C)「参拝するのはあたりまえ」「当然」	135	99	4	238	38.6
(D)「小泉さんだから」	4	8	0	12	1.9
(E) (A) (B) (C) (D) 以外	65	56	0	121	19.7
(F) 無回答	24	38	4	60	9.8

ているが、どうでもいいこととして関心がもてないことを示している。次に、参拝するのはいいことであると答えた学生の自由記述した理由をみていく。

7 質問6で(1)と答えた人の理由は何ですか。

↑参拝するのはいいことであるの自由記述の理由は、次のように分類した。

- (A) 「敬うべき」「追悼すべき」「国のために死んだから」などのことばが入っているもの
- (B) 「個人の自由」に関係するもの
- (C) 「参拝するのはあたりまえ」「当然」に関係するもの
- (D) 「小泉さんだから」という「小泉首相」を理由にするもの
- (E) (A) (B) (C) (D) 以外のもの
- (F) 無回答

参拝に賛成する理由のもっとも多いのは「参拝するのはあたりまえ」「当然」という回答である。「あたりまえ」「当然」がどういう理由で考えられているかはわからないが、マスメディアの影響が大きいと思われる。およそ四分の一の学生がそのように考えていることになる。

靖国神社が現在も「公」^{おおよけ}の施設であると受け取られていることはほぼ間違いない。つまり、「公」というキーワードから靖国神社の特色を考えることも不可欠な課題だと思われる。そこで、津村寛文氏の「公共宗教」論を援用すれば、靖国神社の特色は、「宗教・政治・文化の三領域のどこかに軸足をおきつつ、そこから超越して社会全体に働きかけようとするので、原理的に全体主義と親和的であり、少なくとも政教分離的な分離主義とはなじまない」と理解できる。そうだとすれば、小

泉首相の靖国神社参拝は、先述した柄谷氏が指摘するように日本が専制的社会の様相を強化しつつ、しかもそれを「新自由主義」という衣に覆い隠したパフォーマンスだといえよう。そして、そのような様態を、学生たちはきわめて一元的に受け入れていくようにみえる。つまり、「あたりまえ」「当然」という回答こそがそのことを物語っているのではないだろうか。

また、質問6の△その他△に回答されていたが、ここでも「個人の自由」が理由に入っている。ただし、この「個人の自由」という意味は、賛成にもなれば関係ないという意味にもなる。無関心という心理を内包しているともいえよう。

8 質問6で(2)と答えた人の理由は何ですか。

()

△参拝するのはおかしい△という自由記述の理由は、次のような分類を行った。

- (A) 「戦争を肯定する」「A級戦犯を肯定する」などに関係するもの
- (B) 「隣国・アジア・中国・韓国などの反感をかう」に関係するもの
- (C) 「反対している人がいるから」に類似するもの
- (D) 「首相としておかしい」に関係するもの
- (E) 「政教分離に反する」に関係するもの
- (F) (A) (B) (C) (D) (E) 以外のもの
- (G) 無回答

参拝反対にもっとも多い理由として、三〇・八パーセントの学生が「アジア、とくに韓国・中国の反感をかうから」と答えているのは、マスメディアの影響が大きいのではないかと考えられる。「政教分離に反する」という『日本国憲法』に照らして反対する学生は予想通り少な

表13 <参拝するのはおかしい>という自由記述

	男性	女性	無回答	人数	%
(A)「戦争を肯定する」「A級戦犯を肯定する」	32	23	4	58	21.8
(B)「隣国・アジア・中国・韓国などの反感をかう」	38	42	3	82	30.8
(C)「反対している人がいるから」	1	2	0	3	1.1
(D)「首相としておかしい」	16	22	2	40	15.1
(E)「政教分離に反する」	4	6	0	10	3.8
(F) (A) (B) (C) (D) (E) 以外	22	21	2	45	16.9
(G) 無回答	12	14	5	28	10.5

かった。このなかで、二一・八パーセントの学生が「戦争を肯定することになる」「A級戦犯を肯定することになる」と答えていることは、靖国神社問題の政治的な問題を理解ないし認識していると考えていいだろう。

エピソードにかえて―何を課題として伝えるべきか

今回の学生を対象にしたアンケート調査を通じて、靖国神社問題は、その存在のあり方を理解すればするほど、それは単に過去の戦争の問題ではなく、現在の問題であり課題であるという認識に立つことをよりいっそう深くする。アンケートに回答してくれた学生たちは、「戦争を知らない世代」と分類される。しかし、同じ「戦争を知らない世代」であるわたしの世代（いわゆる団塊の世代）とは違う時代を生きていることも回答から実感する。わたしが生きた戦後には、学生運動も活発であったし、デモの経験もある。先述した「中間勢力」が存在した時代を生きてきたのである。しかし、「中間勢力」がすでになくなった、あるいは弱小化させられた学生時代を生きる現在の学生は、丸山眞男が批判した専制的社会を「体臭」としていると理解できるだろう。これはまた、現代日本の社会構造のネガティブな現実かもしれない。アメリカに始まった経済不安にさらされた学生にとっては、自己たらしとしても自己たり得ない、希望をもつことができな時代社会のまっただなかにいるのである。アンケート調査をした時期はまさにその直前であったし、すでに格差社会と呼ばれていた。

学生をはじめとする若者に夢や希望を抱かせなくさせた責任は、大人たちである。その大人たちは自分たちのしてきたことを隠蔽するために「新自由主義」ということばに隠蔽された専制的社会を強めてきたといえるだろう。こうした新自由主義が支配する専制的社会の様態は、マルクスが著した『ブリュメール十八日』の冒頭のことばで咀嚼することができる。マルクスは、「人間は自分じしんの歴史をつくる。だが、思う儘にはない。自分でえらんだ環境のもとではなくて、すぐ目の前にある、あたえられ、持越されてきた環境のもとでつくるのである。死せるすべての世代の傳統が夢魘のように生ける者の頭脳をおさえつけている。またそれだから、人間が、一見、懸命になって自己を変革し、現状をくつがえし、いまだかつてあらざりしものをつくりだそうとしているかにみえるとき、まさにそういった革命の最高潮の時期に、人間はおのれの用をさせようとしてこわごわ過去の亡霊どもをよびいだし、この亡霊どもから名前とスローガン戦闘標語と衣裳をかり、この由緒ある扮装と借物のせりふで世界史の新しい場面を演じようとするのである」と論じている。小泉首相が靖国神社参拝を毎年断行したパフォー

マンスの実体が読み取れる。そして、その後の日本の政治体制そのものの姿を表しているように思えるのである。

今回のアンケート調査の結果は、これを読む人の思想信条によっていかようにも理解されていい。わたしもその一人として、このアンケートを読んできた。とくに、その過程で今回引用した柄谷行人氏の「地域自治から世界共和国へ」は、最近の講演（二〇〇八年五月二一日）でもあり、より親しみと畏敬の念をもって参考にさせてもらった。そして、そこで語られた「公共」ということばについて、わたしはとくに強い印象を抱いた。彼は次のように語る。「公共的というのは、国家的ということではないですよ。むしろ、それは理念的な事柄です。公共的な関心とは、いわば、家の外、というより「城壁」の外への想像力です。現にあるものだけではなく、未来に対する、さらにまた、過去に対する想像力です。誰でも現にあることから出発する。それは当然です。しかし、今ここにないものへの想像力がなければならぬと思います。理念がなければ、どんな現実的な運動もだめになってしまいます。今はむしろ、高い理念を掲げる必要があると思うのです」¹⁰と。

夢も希望もない専制的社会を意識することもない若い世代に伝言できることこそ、上記の柄谷氏のことばである。しかし、「今ここにないもの」を教えられなかった現代の学生が、「想像力」を抱くことは難しい。それは、「理念」を語ることの困難さでもある。だとしたら、今回のアンケートを通して、柄谷氏のことばはさらに重く感じられる。

柄谷氏のことばの重さを実感しながら、わたしにできることは、「今ここにないもの」を伝えていくことかもしれない。彼らより「中間勢力」を実感できたわたしの世代ができることは、「今ここにないもの」を歴史として捉え伝えていくことであろう。

社会的な系譜を逸脱したアンケート調査報告になったが、本アンケートによって『日本国憲法』第九条を掲げる「理念」が、わたしのなかでさらに深まったと思える。アンケート調査に多大な援助を惜しむことのなかったみなさん、そして集計に協力していただいた鈴木清美さんに感謝の念をもって、この報告を閉じることにしたい。

- (1) 岸本英夫『宗教学』大明堂、一九六一、一二八頁
- (2) 村上重良『慰霊と招魂―靖国の思想―』岩波新書、一九七四年、五一頁
- (3) 田中伸尚『ドキュメント 靖国訴訟』岩波書店、二〇〇七年、九四頁
- (4) 『丸山眞男集』第五卷「戦後日本のナショナリズムの一般的考察」、岩波書店、一九九五年、九六頁
- (5) 岡田臣弘「名古屋商科大学総合経営・経営情報論集」第四七卷一号、二〇〇二年七月
- (6) 柄谷行人「地方自治から世界共和国へ」山口二郎編著『ポスト新自由主義』七つ森書館、二〇〇九年、二五一頁
- (7) (6) に同じ、二五一頁
- (8) 津村寛文『公共宗教の光と影』春秋社、二〇〇五年、五五頁
- (9) マルクス『ブリュメールの十八日』岩波文庫、一九五四年、一七頁
- (10) (6) に同じ、二六六頁